

# シルクロードのタジク人女性をまどわす精霊憑依と防霊術の現在

相馬 拓也

## *Spirit Possession and Folk-Exorcism among Tajik Women in the Current Silk Road*

SOMA, Takuya

### 1. シルクロードの「怖い話」

シルクロードは妖怪、精霊、悪霊などの「怖い話」や「心霊伝承」の宝庫でもある。中央アジアの国々を旅していると、人々の口から妖怪や精霊の類の話が頻繁に上がることに気づく。とりわけ、中央ユーラシアのペルシア系住民、タジク人の間では古来、精霊《ジン》や悪霊《デヴ》による怪奇譚や生者への精霊憑依が強く信じられており、それは現在進行形の生活上の脅威でもある。憑依されるのはそのほとんどが若い女性であり、彼女たちの精神を惑わし、疾患を及ぼす主な理由として、社会で広く考えられている。

タジク人社会に限らず、キルギス人やカザフ人などが居住する草原や山岳地でも、妖怪や“もののけ”などの目撃談が地方社会で語り継がれている。また、ウズベク人の社会では、呪いや呪詛にまつわる話題がひっきりなしに耳に入ってくる。とある社会的地位もある文化人との会話でも、「ウズベク人の90%以上が程度の差はあれ祈祷師に頼って、他者を貶める呪いをかけたり、呪詛返しを依頼しているんですよね」、と当たり前のように話してくれるのには少々面食らうときがある。「興味があれば、首都タシュケントで一番人気の霊媒師や祈祷師のところにお連れしますよ!」、とも。タシュケントでは、こうした会話は公の場でもそれほど忌避されている様子もない。なかでも、タジキスタンをはじめフェルガナ、ブハラ、サマルカンドに暮らすペルシア系タジク人社会での怪異現象は、より深刻さを伴う家庭内・社会問題にもなっている。タジク人社会では、

実体を伴う妖怪や悪魔よりも、精霊《ジン》や悪霊《デヴ》の憑依によって精神の不調や疾患、人生の凋落などをもたらす「精神攻撃」の傾向が強い。タジク人社会に広くみられる家庭内禁忌や掟、女性を戒める掟や箴言などの数々 [相馬 2025] は、怪異や憑依を防ぐための「防霊術」と言い替えても過言ではないほどである。

シルクロードのペルシア系住民のあいだではよく知られた次のような言葉もある [ハンサーリー、ヘダーヤト 1999: 254, 229, 327]。

「黒猫はジンである。それを傷付けると癩癩持ちになる」

「クルミの木の下で寝るとジンが現れる」

「水を竈（かまど）に捨てるものはジン憑きとなる」

猫、クルミの樹、水回りは、とくにジンと関係が深いとされている。現地のタジク人社会で暮らしていると、「扉ひとつ閉じれば、7つの悪霊から守られる」と言われることもあり、ドアや門の開け放ちを戒める表現もある。ただし、悪霊や精霊に憑依されるのは生者だけの話ではない。ペルシア世界では死者が蘇ることは、悪霊による憑依と考えられている。そのため古くから、「死者の胸の上にはクルアーンを置く。さもないとシャイタン（悪霊）がその亡骸に入り込む」と畏れられてきた。イランでS. ヘダーヤトがまとめた民話・説話集『ペルシア民俗誌』 [ハンサーリー、ヘダーヤト 1999: 173-176] の中でも、「棺から起き上がって復活した死人の胸をクルアーンで打って“神の御名のもとに”と唱えたところ、たちまち死人は地面に倒れた」、という逸話が

紹介されている。死体がシャイタンやジンに取り憑かれると、自らの手足で起き上がって動き回ることもできるようになるが、朝の日の光に当たると再び死者に戻ると伝えられている。

精霊憑依は、中央ユーラシアやペルシア世界でとくに忌避されている「邪視」「羨望眼」「チャシム・カルダン」とは、その性質が異なっている。チャシム・カルダンは、「邪視にあてられる」と訳すことができるが、他者（親族や兄弟も含まれる）から向けられた《羨望のまなざし》によって、精神や身体、生活行動に不調がもたらされることを全般する。邪視「チャシム・カルダン」がより物理的事件・事象、身体の不調、人生の局面的な不運、などをもたらすのと異なり、精霊憑依《ジン憑き》は精神の不調や疾患などの社会生活を困難とする深刻な問題として、現在もタジク人（とくに女性）を苦しめている現実がある。ジンやデヴによる憑依は強く信じられており、とくに何かに驚いたりしたときに、人間に憑く可能性が高まるとされている。かつて女性が何かに驚いたりしたときは、「黒い山に顔を向ける」と言った厄除け行動もあったと伝えられる〔ハンサーリー、ヘダーヤト 1999：210〕。そして「夢に現れるヘビもジンの化身」とされ、女性たちの警鐘夢として警戒されている。

本論は、2023年3月、11月、2024年6月に実施した、タジキスタン南部と東部山岳地でのフィールドワークで得られた、インフォーマントによる霊的体験、精霊憑依などのほか、伝聞・言い伝え・伝承などの語りを「憑例」として収集し、自身の旅と暮らして得た主観も交えたフィールド調査報告の体裁で記述した。タジキスタン国内のフィールド調査は制約が多いことから、実際に訪問できない際は、電話などのリモートインタビューで対応した。とくに女性に関する語りや、地域の女性へのアクセスは外国人男性にはきわめて困難であることから、現地の実務支援者（女性）たちに聞き取り調査を依頼し、情報を取りまとめた。

※本論では、インフォーマントや訪問地の名称・詳細については、プライバシー保護の観点からあえて詳述を避けて記載した。また文中の図版はすべて筆者による描き起こしおよび撮影。

## 2. タジク社会に息づく精霊と妖怪

繰り返しになるが、タジク人女性たちにとって、

ジンによる憑依現象は、精神の混乱や生活困難な事象、対人関係での不和などをもたらす深刻な社会課題にもなっていることは、強調しておかなければならない。ジンは一般には「精霊」「幽精」「妖霊」などと訳されるが、ペルシア世界では「人ならざる霊的存在」を全般している。ジンには男性と女性の別があり、ムスリムと非ムスリムの区別も存在する。ムスリムのジンは、一般に善性の「聖霊」とされ、人間に対する悪さはしないとされている。人間に取り憑くジンは、そのほとんどが「非ムスリムの霊体」と考えられている。近年タジキスタンの南部では、「中国語を操るジン」の存在〔→後述、憑例③〕も確認され、人間界同様にジンにも多様な性質や霊格が備わっていると信じられている。そして、ジンはさまざまな形状や生物として現れる。霊的存在とは、物理世界と精神世界を横断する存在《境界性思念》と定義することもできる。動物はその存在を感知することができることとされ、ジン憑きの人間を近くに感じると気配を感じて騒ぎ出すこともある。タジキスタンの地方農山村では、「夜間にイヌが遠吠えすると、その家で誰かが死ぬ」とも言われている。そのため、家人もイヌの遠吠えをやめさせたり、家の敷地から追い出したりすることも見られる。《被憑者》が、動物から忌避されるといわれる所以である。

精霊伝承はタジキスタン各地に残っているものの、ハトロン州東部山岳地から、多くの体験談やオーラルヒストリーが収集された。同地域の70代の長老MM氏は、地元の怪魔や妖怪のことについて、詳細に記憶しており、まるで自身で目にしたかのように、驚き、恐れ、生々しい憑依事例（憑例）を話すのが印象に残った。同地域は、古式を重んじる「純粋な」タジク人の集落が古くから営まれているとされる。外部との接触が制限された閉鎖性の高い社会環境であることから、長老級人物たちに伝わるオーラルヒストリーには、精霊憑依が現実存在し、社会生活を混乱に陥れる古来の迫真性が感じられた。

タジク人社会では、おもに以下の精霊《ジン》がとり沙汰されることが多い。

アジナ Ачинна：東部山岳地で語られるアジナの姿は、白い猫のような精霊で、「妖怪」に近い存在と考えられる。アジナはさまざまな姿形で人の前に現れるといわれる。黒くて背が低く、毛むくじゃら、

と言われることもある。古い学校に宿るとされ、夜の校舎内を徘徊しているため、絶対に近づいてはならないといわれている。窓越しに、外からその姿を目視できることもあるという。その姿は、真っ白でぼさぼさとした長い毛足に四足歩行で耳があり、尻尾も生えていたという目撃談が多かった(図1)。ネコのような姿で、大きさもネコ程度とされる。話から推測すると、ぼんやりと光を放って透き通る霊体のような雰囲気と思われる。しかし、人間に積極的な危害や悪さを加えるわけではない。この地域のアジナも、ジンやその他の精霊と異なり、人間への憑依は一般にはしないとのことである。ただし、“アジナ・ワラ” ачинна вара (=「アジナ憑き」) という言葉もあることから、憑依されることも稀にある。その際は、他のジンや精霊と同様に、精神状態や行動・言動に支障をきたすことがあるという。

アジナとは、広く“ジン”を表す一般名詞ともされているが、一説によると、アラビア語起源の胎内の「胚」の状態の赤子「胎児」を意味する“Aljanin (الجنين)”とも関連付けられている。アジナは、ペルシア的な精神世界を部分的に共有するテュルク系民族(ウズベク人やトルクメン人など)のあいだでも信じられており、その見た目は地域や場所によってさまざまに伝えられている。ときには恐ろしい人間の形で視認されたり、乙女や赤ん坊の姿で現れることもあるとされる。ほかにも、長い髪の老婆や、角の生えた赤い目をした子供の姿、あるいは半身がヤギの姿としても現される[Энциклопедияи Миллии Тоҷик 2014]。人獣合一の姿で表されるこ



図1 伝聞から描き起こしたアジナの想像図

とや、廃墟や廃屋に現れるという点では地域を越えて広く共通している。

ウォル Уол: ウォルはきわめて危険な精霊とされ、より物理的な被害をもたらす「怪物」「魔物」に近い存在と思われる(図2)。武芸に達者な武人や戦士、スポーツマンなど、身体能力に優れた人物だけを対象に戦いを挑み、勝負に敗れた人間を殺してしまう。地域でも、かなりたちの悪い悪霊《デヴ》だとみなされている。その姿は全身が真っ黒な毛むくじゃらで、極端に大きな手足を持ち、大きな目玉がひとつに、口を開けた姿だといわれている。東部山岳地のC村では3年ほど前(2020年初夏)の早朝、川沿いの村道で倒れている男性が発見された(図3)。男性はすでに死亡しており、その体には争ったような多数の傷跡が残されていた。村人たちは、この男性はウォルとの戦いに敗れて死に至ったとの結論に達し、村中に戦慄が走ったとのことだった[MM氏 2023年3月12日/東部山岳地]。ウォルの視覚的なイメージは、「雪男みたいな巨人」とする地元民の意見も聞かれた。

パリエй пари: パリエイは精霊のなかでも上位に位置する憑依型の「妖霊」と考えられている(図4)。物理的に人間に攻撃を仕掛けてくる他、憑依によってその人物の心身に障害を負わせたり、精神を崩壊させたりすることがある。その最大の特徴は、人間の男性や女性に恋をすることが多く、恋愛感情を抱かれると、その人間にとり憑き、死に至らしめることもある。その見た目は、彫刻のように美しい(女性のような)顔立ちをしており、一見すると人間のようなのだが、脚はない。あったとしても、ヤギの脚に似ており、体は白く半透明と言われられる。集団となって楽器を弾きながら、空を飛び回る一団が目撃されたこともある。

フィールド調査で訪れた東部山岳地C村で、2023年3月頃にパリエイによる物理的被害があったとされる。同地でとある農夫が1年ほど前から養蜂を始めたところ、運悪くパリエイの通り道《霊道》に養蜂箱を設置してしまったとのことだった。男性が養蜂場へ作業に行くと、養蜂箱が毎日散乱して荒らされていたとのことだった。そのため、男性が夜中に養蜂箱を見回っていたところ、実際にパリエイから集団で暴行を受ける事態となり、全身に手傷を負ってしまったという。結局、養蜂箱をすぐ脇の別の場所に移したところ、パリエイによる怪異はおさまった

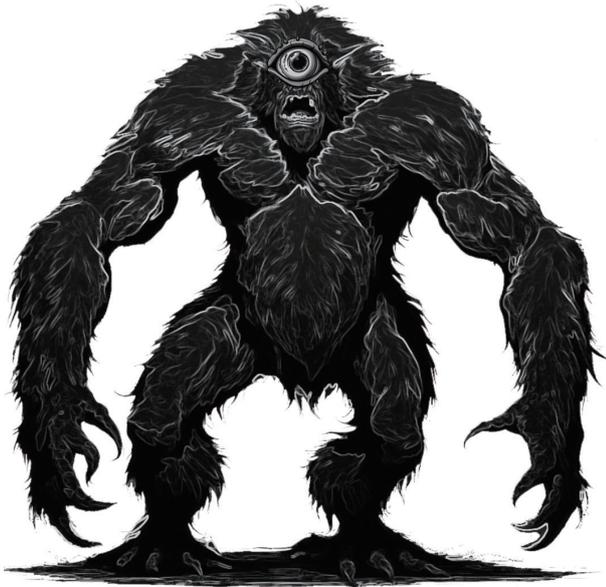


図2 伝聞から描き起こしたウォルの想像図

とのことだった [MM氏 2023年3月12日／東部山岳地]。地名は特定しないが、養蜂箱の設置されていた場所は、人里からかなり離れた山間の南斜面であることを確認した (図5)。

ジャオバグ Чабар:ハトロン地方南部の固有霊に、“ジャオバク”という精霊がいるといわれている。この精霊の姿は決して見えないため、その霊態はわからない。ジャオバグは人間の名前を身近な人の声で呼びかけ、人を林の中や綿花畑に誘い出すことがあるとされる。それほど人に悪さをするわけではなく、とり憑かれることも多くはない。ただし、同地のP村では10年ほど前に、ジャオバグに魅入られた温厚だった男性が、突如として暴力をふるうようになったという事例が聞かれた。パンジ、タヴィルダラ、ダルボーザなどではよく知られている精霊とされる。

### 3. 精霊による怪異と憑依

#### 3.1. 昨今の精霊憑依の事例

こうした精霊憑依への防霊術として、タジク人女性の生活行動には、いくつもの制約や掟が確認される [相馬 2025]。“バロー” (балло) (=精霊の名を口にしないための代替語) に見舞われないため、女性は夕方独りで、離れた風呂場や洗面所、鏡の近くに行ってもいけないと戒められる。ジン、シャイタン、デヴ、パリエなどの精霊は、音楽、酒席、にぎやかな場所、などを好んで近寄ってくる。喜んで踊



図3 C村で2年ほど前(2021年春)に、ウォルに殺された人が倒れていたとされる現場付近。周りには、人間のモノならざる大きな足跡が残されていたという。

りに参加してくることもあるという。結婚後の40日間(“チル”)に、新郎や新婦にとり憑きやすくとされ、新婚者の前では、“ジン”、“デヴ”、“パリエ”、“アジナ”などと口にすることも禁忌とされる。また、結婚して間もない女性へのインタビューでも、これら精霊の名や、連想する用語を口にすることは強く戒められた。そのため、暗くなった夕暮れ後、結婚前後の女性、産後や幼児のいる家庭など、こうした情報の収集はとりわけ困難であり、現地の女性の実務支援者を介することでしか、アクセスできない貴重な情報でもあった。

以下、フィールドワークで聞かれた精霊憑依の事例をまとめてみる。

【憑例①】 東部山岳地でまだソ連時代だったころ、デーモン峰と呼ばれる場所で、女性が薬草を取りに行ったまま戻らず、ほどなくして木の枝にぶら下がって死亡しているところを村人に発見された。その体には、女性の体を握りつぶすほどの大きな手の跡が残されていたという。この女性は、パリエか別の悪霊によって殺されたと考えられており、そのことからこの場所はデーモン峰 демон と呼ばれるようになった [MM氏 2023年3月12日／東部山岳地]。

【憑例②】 D村では2012年に、結婚式を終えたばかりの新婦(20代)にジンがとり憑き、離婚に至るといった憑依事件があった。結婚後まもなく、新婦の様子がおかしくなり、誰もいない部屋で独りきりになったと思うと、誰かと会話したり、笑い声をあげるようになった。パリエ憑きと判断された新



図4 伝聞から描き起こしたパリの想像図

郎とその家族から、一方的に離婚を告げられ、実家へと帰された。しかし、離婚して10年間ほど実家で暮らす現在でも、彼女の精神状態は改善されずにいまに至るという。周囲の人々が話す理由をまとめると、次のようなものだったらしい。彼女の父親がイスラーム牧師（ムラー）で、精霊祓いもよく請け負っていたとのことだった。あるとき、父親の有する除霊の力よりも、もっと強いジンと対峙してしまい、その邪力が払われきれず、自分の娘に害を及ぼした、と語られている。こうした事例は、精霊払いの家族や親族には、頻繁ではないが耳にすることがあった。

【憑例③】 D村の入口付近には、かつてパリのたまり場だったといわれている岩山がある。その場所は、かつて家畜囲いなどウシやヤギをつなぎとめていた畜産場として利用されていた。十数年前（2010年頃）に、パリィに魅入られた村の女性（10代後半）が数日間姿を消してしまったことがあるという。村人総出で探したものの見つからず、数日が過ぎたのちに、この岩山付近の洞穴のなかで発見されたとのことだった。この場所に来た時の彼女の記憶はあいまいで、呂律の回らない精神状態だったとされる。村人は、パリィ憑きになった少女が、パリィの意思でこの場所に連れてこられてしまったのだという。

【憑例④】 ドシャンベ市内で乗り合わせたタクシー運転手から、《中国語を話すジン》と出会った、という話を聞くことができた。同氏によると、ハト



図5 パリィによって毎晩被害があった養蜂箱の設置地点。パリィの通り道は、他にも多々あり、注意が必要とされる。

ロン州南部のとある村でつい最近、村内在住の女性（20代主婦）の様子がおかしくなり、ジン憑きと判断された。ただちにムラーが訪問して精霊祓いを実施する事態となり、スラ（クルアーンにある聖句）を読み上げてお祓いを始めると、突如として、この女性が中国語で話し始めて周囲を唖然とさせたという。この女性は中国語の学習経験などはなく、村外の大学などに行ったこともなかったという。これはタジク人社会でも初めてのことで、村外にも噂が広がり、首都ドゥシャンベでも話題になるほどであった。ジンは動物の姿になることができると同時に、人間の様々な言語を操ることもできるといわれる例証の一つといえる。

### 3.2. 防霊術と精霊祓い

タジク人社会では、女性が暮らしに課された制約や態度とは、ある意味ではそのほとんどが“バロー”を打ち祓うための「防霊術」と言い換えることもできる。一方で、ジンや精霊憑きのことを考えすぎたり、怯えすぎることも、逆によくないとされている。タジク語では、精霊や悪霊によってもたらされる不運や不幸の語を忌避して、“バロー”と言い替えることが多い。「ジン」は夜間の禁忌語とされ、その代わりに“バロー”を用いるように筆者も現地でもよく論された。インタビューに同行してくれたタジク人女性は、夜間に「ジン」などの単語を口にすることも、またこちらからの話として聞くことも、ひどく嫌がったため、夕刻以降のインタビュー調査は、調査期間中を通じて実施することができなかった。暗くなり始めた宵の口頃から、こうした言葉に

敏感になっている様子が伝わってきた。

日常を過ごす何気ない生活空間にも、ジンやデヴの宿りやすい場所が数多く認められている。そのため、女兒や年頃の女性たちには、箴言としてジンの宿りやすい場所への忌避が幼少期から教え込まれる。なかでも「汚れた場所」「散らかった部屋」「風呂や洗濯などの水場」といった《穢れた空間》には、ジンが宿りやすいとされている。トイレに長時間居座ることも禁忌とされる。暮らしのなかでは、「かまどの灰を踏んでは決していけない」と注意されるタジク社会だが、かまどから捨てられた捨て灰のなかには、ときおりジンの「こども」(幼霊)が潜んでいるためでもある。その「こども」を踏んでしまうと、ジンは怒ってたちどころにその人物にとり憑くとされる。ほかにも、しゃっくりをした瞬間や、何かに驚いてびっくりした瞬間を見計らって、ジンは人間へととり憑くとされている。日常を心穏やかに過ごすこと、心を強く持つこと、で憑依を防げることが、幼少期から教え込まれている。

実際に憑依されてしまった人物には、精霊祓いの施術が施される。ジン祓いにはさまざまな方法があるが、ナイフで被憑者の足の親指や、腕の付け根を刺すといった身体への付傷も一般的である。その場に居合わせた人物の話では、施術のときは、被憑者本人は痛みも何も感じていないことが多いとされる。スラを読み上げると本人が口を開いて発話もするが、本人はまったく何も憶えていないこともある。実務支援者の音楽好きの姉(当時20歳)が学生時代に、学生寮の自室で大きな音楽をかけて独りで踊っていたときに、腕からジンがとり憑いてしまったことがあったという。精霊祓いにも来てもらい、施術中にムラーからいくつもの質問に答えたりしていたが、何も憶えていないとのことだった。施術中に、被憑者とジンとの身体的連結が緩み始めると、突如として息苦しさを暴れだしたり、悶絶することもあるといわれる。女性でも、男の声で話さずこともあったとされる。

精霊祓いのできるタジキスタン国内のムラーのほとんどは、ソ連末期から内戦時代を経て、逮捕・監禁されてしまった経緯がある。反イスラーム的な行為とされ、取り締まりの対象になったためといわれている。

#### 4. 考察とまとめ

「外国人目線」で見ていたペルシア系タジク人社会を「精霊憑依」の知見から探ると、女性たちは何をそんなに恐れ、なににおびえているのか、というタジク人女性を取り巻く教育、仕事、留学、社会進出などの制約と畏れがありありと浮かび上がってくる。タジキスタン国内では、精霊憑依の体験談や伝聞などは、地元民に真正面から聞いても、まず答えてくれることはない。その中には《邪術》を施す者もいて、警戒されているからだという(とくにテュルク系には呪術者が多いとされる)。情報漏洩によって当事者たちが検挙の対象となったり、不利な立場に追いやられることが今でもあるためである。ある意味では、もっともアクセス困難な情報であり、それにもかかわらずタジク人女性の社会生活をもっとも制約し、苦しめる一因ともなっている。タジク人社会における精霊・妖怪・憑依については、サマルカンド出身の民族学者オルガ・A. スハレワ(O. A. Сухарева)が100年前にきわめて詳細な記録を残している[Сухарева 1975]。同氏が、タジキスタン中部イスタラフシャンなどで行ったフィールドワークでは、“モモ” момо、“アルバスティ” албасты、“アジナ”、“デヴ”、“パリィ”といったさまざまな精霊と憑依の事例について言及され、当時は現在よりもさらにその霊験信仰は強かったことが、具体的な詳述から浮き上がってくる。この手の防霊術の研究を始めてみると、ロシア人女性として生きながら、閉鎖的なタジク人女性コミュニティに深く入り込んだエミックな視点には、目を見張るものがある。日本人の妻、小泉セツや数多くの支援者から、怪談話を丹念に聞きとった小泉八雲の『怪談』[1904]とは、その調査の自律性は大きく違っていたといえる。

筆者は、幽霊や心理現象の存在を信じてはいないものの、正直言って怖い話がとても嫌いである。そのため、タジク人社会に伝わる精霊憑依や怪異の数々は、精神疾患や心理状態の不調の説明変数として、霊的存在が介在されているものと割り切って考えることができる。霊性存在を、健康や精神の負の転機とする情動的な理由には、以下のような社会事情が要因すると考えられる。

- (1) 超自然現象や怪異を仲介させた、人生の不幸や災厄に対する精神的負荷の迂回・軽減[心理対処]。

- (2) 精神状態や生活環境の抑揚を「擬霊化」することによる自身と他者への戒め [箴言性]。  
 (3) 人生の不調を客観化して認知するための説明変数としての霊性憑依の介入 [責任回避性]。

イスラーム教圏では、神アッラーに類するいかなる存在も認めていない反面、神に仇為す悪魔や精霊には多種多様な存在があり、地域の土着信仰などとも融合して人々の暮らしと信仰に脅威をもたらしている。いわば、「われわれ」の信じる《現実》というものが、きわめて相対的で不安定であることに気づかされる。それは、エリアーデ [1969] の主張する《聖体示現》とは逆向きの負の経験、ある意味では《邪体示現》ともいえる経験の社会広範な共有を意味しているようにも思われる。そしてその恐怖が、タジク人女性の生活を精神世界の面から圧迫している事実を、国際社会や、筆者のような社会調査者も受け入れなければならない。タジク人女性の生活福祉や精神衛生のウェルフェアを達成するために、その理解が最初の一步となるためである。

マーヴィン・オプラーが1940年代に暮らしたトゥーリーレイク日系人収容所では、収容された日系2世たちが、伝聞でしか聞いたことのないヒトダマや、キツネやタヌキによる化かしにおびえる様子が伝えられている [Oplar 1950]。創作の世界では、《霊圏》という地理的区分による霊力の制約・限界が、『うしろの百太郎』(つのだじろう 1985) や『ダンドダン』(龍幸伸 2021) など述べている。ただし、トゥーリーレイクの日系人の霊的現象の追体験を例にすると、人間の畏怖や恐怖する心理態様(恐怖や畏怖による霊験)が、その場所に新たな《霊圏》を生み出すという解釈もできる。つまり、霊験によって生じる妖怪や精霊の「認知」とは、地域を超えていわば「伝染する」と考えられる。人間が恐怖する根源は、地域や時代を超えても、その多くが共有されることを考えると、アラブ起源とされる妖霊アール(アルバルスト)の汎ユーラシア的広まりや、ペルシア起源の精霊パリアや、チャシム・カルダン(羨望眼)などの精霊譚と防霊術がテュルク系民族にも広く流布していることにも、うなずけるものがある。

精霊や悪魔憑きといったテーマは、初期の文化人類学者やシャーマニズム研究の中で、「文明世界」との対置関係の中の距離感によって押し量られてきた。それは概して「未開観」を前提とした否定的見

解の表れでもあった。しかし、現在のタジク人社会で精霊憑依と防霊術に目を向けた研究を萌芽させる理由は2つある。

- ① 現代社会では一般的となっている精神疾患に対する医療対処において、心療内科や薬餌療法だけでは解決しないフォークロアがそこに横たわっているという事実である。これは、国際協力、国際医療、障がい者支援などの現場で共有されるべき民俗知と考えられる。  
 ② 精霊憑依による精神衛生の侵害が日常化された脅威として認知され、タジク人女性の教育・恋愛・留学・就労・社会進出にも大きく作用(制約)しているという現実である。タジク人社会では、女性への社会的制約と結婚圧がきわめて強く残る。半袖の着用は禁止、留学は非推奨、語学の学習は望まれないなど、そもそも女性が大学に通うことを、家族・親族が許さないことも珍しくない。こうした背景には、精霊憑きとなることの防霊術を部分的には含んでいることに注意する必要がある。

シルクロードのタジク人社会、とくに女性たちの生活誌にかかる調査は、その閉鎖性のためにきわめてアクセスの難しい課題となっている。スハレワに匹敵するような調査が、今後も実践されるかはきわめて難しいと予想される。そして、人間の可領域(人類社会のコントロールがおよぶ)と不可領域(人知ではどうすることもできない)、いわば人間界と自然界の間隙を埋める存在として、精霊や妖怪の存在は、人々の環境共生観の表れのひとつでもあり、自然の驚異を忘れないための「戒め」の一つであるということ、こうした調査では思い知らされるものがある。

#### 参考文献

- エリアーデ, ミルチャ (風間敏夫 訳). 1969. 聖と俗: 宗教的なもの本質について. 法政大学出版局  
 ハーンサーリー, A. J., ヘダーヤト, サードク. (岡田恵美子, 奥西峻介 訳). 1999. 『ペルシア民俗誌』, 平凡社: p.62, p.73-74, p. 173-176, p.210, p.254, p.299.  
 相馬拓也. 2025. タジク社会における祈りと掟の箴言誌 フィールドノート, 早稲田大学高等研究所紀要 (第17号): pp.43-51.  
 Opler, Marvin K. 1950. Japanese Folk Beliefs and Practices, Tule Lake, California. The Journal of American Folklore 63 (250): pp.385-397.  
 Снесарев, Г. П., Басилов, В. Н.. eds. 1975. Домусульманские верования и обряды в Средней Азии. Наука: 5-93.

[[https://www.phantastike.com/religion/domusulmanskiye\\_verovaniya/djvu/view/](https://www.phantastike.com/religion/domusulmanskiye_verovaniya/djvu/view/)] (Last accessed: 25<sup>th</sup> Sept, 2025)

Сухарева. О. А. 1975. Пережитки демонологии и шаманства у равнинных таджиков; In

Энциклопедияи Миллии Тоҷик. 2014. [таҳм. 25 ҷ.] / сармуҳаррир Н. Амиршоҳӣ; 2011-2023, ҷ. 2. [<https://tg.wikipedia.org/wiki/%D0%90%D2%B7%D0%B8%D0%BD%D0%BD%D0%B0>] (Last accessed: 25<sup>th</sup> Sept, 2025).